

第百五十二話 台湾防衛に寄与した帝国軍人

台湾との関係は、日清戦争に伴う下関条約に基づく日本統治時代（1895～1945）、終戦後の台湾との数年間の国交回復時代、1972年の日中国交正常化以降の時代と変遷した。日台関係は現在機微な関係にある。台湾は、日本にとっては政・戦略的に重要な位置にあるにも拘らず、一步が踏み出せないジレンマを抱えている。

ところで、終戦後、中華民国統治時代の台湾軍にあつて、台湾防衛に寄与し、台湾軍創設に寄与した帝国陸軍軍人が居たのであるが、そのことを再確認すべきだろう。

1 根本博陸軍中将他



- (1) 根本博略歴：福島県出身、士23期、終戦時陸軍中将、1966年没(74歳)
- (2) 駐蒙軍司令官として、終戦後も侵攻を続けるソ連軍に対し、一切の責任を負うと日本軍守備隊に抗戦を命じた。八路軍からの攻撃にも耐え、居留民4万人を守り抜いた。8月19日、北支方面軍司令官を兼任した。翌1946年8月、在留日本人の内地帰還と北支方面軍35万人の復員を終わらせた後帰国した。迅速な内地帰還・復員は、蒋介石の協力もあり、根本中将と中華民国軍の密接な連携の賜物であった。

(3) 台湾渡航(密航)と金門島決戦(古寧頭戦役)作戦指導

根本は、1949(S24)年6月、蒋介石の恩義に報いるべく、延岡から台湾に密航、発見・投獄されるも、台湾軍上層部の意向もあり、8月中旬蒋介石と面会、孤立無援の蒋介石は根本の協力を受け入れた。

支那大陸から僅か2.1kmに位置する金門島に、1949年10月25日、砲兵の射撃支援の下侵攻してきた中共軍8個連隊に対し、根本は顧問として作戦を指導した。誘致導入作戦は功を奏し、中共軍を見事に撃退した。これにより台湾の存立が確定したと云える。1952年6月帰国した。密航は不起訴処分。

2 白団(ばいだん)

(1) 白団結成

国共内戦に敗れた中華民国政府は、1949年12月台湾に移転(動)した。時を少し遡る同年9月10日、東京高輪の旅館で、日本陸軍将校と中華民国政府の関係者の秘密会合が持たれ、劣勢で大陸喪失の危機を迎えた国民党軍に対し協力する旧軍将校の団体として「白団」が結成された。

団長は、士23期富田直亮元少将である。

(2) 台湾軍の基礎確立に寄与した白団

富田らは大陸での作戦指揮を執るも、戦い利あらず蒋介石一行と共に台湾に渡った。台湾軍に対して、次のような教育を行った。

○円山軍官訓練団(1950～1952年)

普通班(少尉から少佐)、高級班(大佐以上)、人事訓練班及び聯勤後勤教育(現職軍首脳等)、海軍教育

○石牌実践学社(1952～1965年)(本校出身者でなければ師団長以上に昇進できずと)

○陸軍指揮参謀大学(1965～1968年)

○富士倶楽部(1952年秋～1963年頃迄)

軍事研究所、多数の旧陸・海軍軍人が参加して、各種研究・資料作成・分析等々

(3) 主要団員 募兵に協力した高級将校、主要団員(富田氏ら7名)、

富士倶楽部メンバー(服部卓四郎氏他)

(4) 蒋介石は白団の能力を高く評価していた。米軍は旧日本軍人の参加を問題視した。

* 日本軍人の経験と能力を、敵ですら高く評価して居た証左であろう。台湾軍には今なお脈々として日本軍の魂が継承されているものと信じたい。

(第百五十二話 了)